熱戦のエピローグ　月下の孤高狼編①

オオスカシバ

人物紹介

メインメンバー（鈴蔵中女子卓球部）

春山桃花

　中学二年生。慎重で思慮深い性格。また感受性も豊かで、他人の心に寄り添う優しさを持っている。思考は一見大人びているが、純粋無垢な一面もあり傷つきやすい。それゆえ挫折しやすいが、ブルーギルズの仲間たちの支えもあって成長の糧へと変えている。あまり公言していないが、感性を生かして詩を書くのが得意。

佐原涼花

　中学二年生。どちらかというと男性的。分析力があり行動が早いが、自分に自信があるために時々間違った方向に突き進んでしまうこともある。メンタルも強く、難題にも果敢に挑むことができる。また、桃花がピンチに陥った時には身の危険を顧みず守り抜こうとする勇者のような頼もしさを持つ。

助っ人たち

袴塚綾音

　風島中二年、女子卓球部。通っている中学は違うものの、鈴蔵中の二人とは同じ塾に通っていて、そろって成績優秀者の集まるコースで学んでいる。高校生になるまでスマホを持たせてもらえない二人に代わり、手慣れた様子で依頼人とのやりとりを行う。また、広い人脈を持ち、依頼解決に役立つ情報を入手してくることもある。

加賀珠美

　木ノ道中二年、女子卓球部。ものづくり部と兼部していて、ロボット開発を始めとする工学に精通している。研究者の卵にふさわしい才能を持っているためにメディアに取り上げられることもあり、ちょっとした有名人である。ブルーギルズの認知度をあげるため、ホームページを作って管理を行っている。

見川蒼葉

　木ノ道中二年、女子卓球部。部活の実績は珠美に次いで二番手で、彼女のことをライバル視している。理系の

珠美とは対照的で文才があり、ホームページに記事を書いている。かつては妬みから珠美をいじめていたが、ブルーギルズによって説得され、無事更生。珠美とともにメンバー入りして活動をサポートするようになった。時々月乃の所属する文藝サークルで修行をしている。

春山月乃
　桃花の姉で、教育学部の二年生。サークルは文藝部に所属している。桃花と異なり免許とスマホを持っているため、親の代わりに桃花や涼花を送迎したり、情報伝達の仲介役を担っている。彼女も鈴蔵中の女子卓球部に所属していたが、その過去を仲間たちに語ることはなく、謎多き存在となっている。

プロローグ
　むかしむかし、とはいえまだ十年も過ぎていないのですが、日本のどこかにある浜塚市が舞台のお話でございます。ごく普通の公立中学校、鈴蔵中の女子卓球部に、順風満帆な学校生活を送っていた二人組がおりました。二人の名は春山桃花と佐原涼花。仲の良かった二人は、互いの持ち味である優しさと勇気を活かし、他校の卓球部員のお悩み解決をする組織である「ブルーギルズ」を立ち上げました。何だそれって？　想像してみてください。自分の学校の仲間たちの声援が響く中、卓球台に向かう選手たち。目の前に立ちはだかる相手を倒すことだけ考えるでしょう。でも、本気で挑んでくる相手が、どんな秘密を持っていて、どんな生活を送っているのか？　卓球部にいて本当に幸せなのか？　なんて考える余裕ないですよね？　でも、ちょっと変わり者の二人は、この「出会い」とともに湧いてくる選手への関心に部活の楽しさを見出したようです。依頼主の卓球部人生がバッドエンドになりかけていたら、エピローグを書き足してハッピーエンドにしてしまうのです。鈴蔵中のユニフォームが青色であったことと、生息地を侵略的に広げていく外来魚ブルーギルのように、街中の卓球部員にハッピーをもたらしていきたいという思いから名付けられました。メンバーは二人だけではなく、何人かの助っ人も存在しました。その多くは何らかのきっかけで二人に出会い、力になろうと入隊を決めた他校の卓球部員でした。しかし、それだけではありません。桃花の姉である大学生の月乃も、彼女たちの活動を支えていました。中学生はみな月乃のことが大好きで頼りにしていました。ところが、月乃は本当の後輩のような仲間たちに、自分の卓球部時代を語ることがなく、謎めいた存在でした。そのため桃花や涼花たちは、なんとかして秘密を知りたいと思うようになってきました。

お話を始める前に、メンバーの活動を振り返っていきたいと思います。

ブルーギルズ　二年次の活動記録

第一話　難易度☆

依頼主は海辺の中学校の女子卓球部に所属する、双子の三年生。受験勉強と部活で多忙な中、実家の民宿の手伝いをしていた。二人はゴールデンウィークを前に、宿泊客にプレゼントするお宝を海岸で集めなければならなかった。しかし、桃花と涼花の協力もあって、短時間でお宝の収集に成功。お礼として、最後に依頼主の双子とともに修学旅行のような楽しい夜を満喫した。

第二話　難易度☆☆

浜塚市の中学二年生は五月になると、様々な事業所で職場体験を行う「ジョブフェス」に参加することになっていた。学校近くの温泉施設を選んだ二人は、参加者の中に鈴蔵中と学区が隣り合う強豪校の選手がいるのに気づき大興奮。仲良くなって休憩時間に温泉卓球で真剣勝負をするも、全く歯がたたずその実力に圧倒された。そんな彼女だったが、肝心の仕事は失敗ばかりで、自分に自信を持てずにいた。しかし、涼花の熱血指導のもとスキルを向上させていき、最後には成長した彼女を筆頭に三人で力を合わせ、温泉施設で起こったある事件を解決する手柄を立てた。そして、将来の夢を熱く語った。

第三話　難易度☆

後にブルーギルズのメンバーになる珠美からの依頼。ものづくり部と兼部している彼女は、春山姉妹、涼花、綾音に、自らが開発したペットロボの被験者になるよう依頼した。かわいいロボットと生活し癒されるとともに、珠美を始めとするものづくり部の仲間たちとも親睦を深めた。しかし、別れ際に聞いた仲間たちの発言には、珠美が卓球部でいじめを受けていることを暗に示すものがあり、ブルーギルズは警戒を強めていた。そして、直後に行われた大会にて、いじめを確信する出来事を目撃してしまう。その悲惨な光景にメンバーは深い傷を負って一度は挫折したものの、珠美を救うべく再び立ち上がった。

最終話　難易度☆☆☆

いじめを止めようと立ち上がったブルーギルズだったが、作戦が迷走。方針の違いから、桃花と涼花は喧嘩を

してしまう。二人を信頼している顧問に諭されて仲直り。原因に珠美のいじめがあることを打ち明けると、その行動力を賞賛され、協力してもらえることになった。助っ人を含めた全員であらゆる手段を駆使し、大会会場でいじめの主犯格である蒼葉を発見。説得を試みたが、自暴自棄になり暴れる蒼葉を前に、桃花と涼花は絶体絶命のピンチに陥ってしまう。助っ人や顧問のファインプレーによって大惨事は免れ、蒼葉も罪を認め反省。部活内でもミーティングを行ったことで、いじめが根本的に解決。更生した蒼葉は、ライバル視していた珠美と長所を生かしあってブルーギルズを支えていくことに決めた。その数か月後、二人のいる木ノ道中と練習試合をすることになった桃花、涼花は、休憩時間中に雑談を楽しんだ。その中で、ひょんなことから月乃の話へと発展。一方、桃花たちを迎えに行くべく自宅を出ようとした月乃は、直前に母親からある話を持ち掛けられる。その際、過去の秘密を隠そうとした月乃は母親と口論になってしまい、飛び出すように二人の元へと車を走らせたのであった。

2016年12月　一期最終話からの導入

桃花と涼花を連れて帰るべく木ノ道中の駐車場に到着していた月乃は、エンジンを切ってブランケットに身を包んだ。あたりを見回し、まだ中学生が出てくる気配がないのを確認すると、スマホを開いた。

SNSで大学の友人らがあげている写真を見ると、週末であるためか、運動部員は遠征先での一コマを載せていた。しがない文化部員の月乃は、その一つ一つに「いいね」をつけながら週末の虚無感を味わった。

一通りチェックが終わると、スマホを閉じてフロントガラスを見た。片付けが長引いているのか、まだ生徒が出てくる気配はなかった。寒くて狭い軽自動車は、まさに檻のようだ。夜空の月を見上げようと視線を持ち上げると、ぶらさがったお守りが目に入る。中学の時に部活のエナメルバックにつけていた勝守。愛着が湧き手放せずにいた。彼女の方を向いた表面（おもて）には、月に向かって吠える白い一匹狼が描かれていた。勇ましく吠えている狼だが、閉ざされた車内で苦痛を訴えているようにも見える。瞳の赤は、酸素不足の血液のように濁っていた。

誰にでも忘れられない楽しかった思い出はあるだろう。けれど、月乃は忘れられない後悔の呪縛とともに生きていた。

ブランケットにくるまって仮眠していると、コンコン、と窓を叩く音がした。二人が戻ってきたようだ。

「お願いします」

いつものように涼花が乗り込み、言われなくともシートベルトをつけた。妹が良識ある友人を持ってくれたこ

とがうれしかった。
「じゃあ、行くか」
エンジンをかけてゆっくりとブレーキから足を離す。年式の古い中古車は、下品なエンジン音を立てて動き出した。
普段は話し足りないほど車内が盛り上がるのに、今回は異質だった。それもそのはず、桃花も涼花も、月乃を包む闇の存在を感じ取り、口を開く元気が出なかった。
桃花は車窓から追い越し車線のテールランプを追っていた。練習試合の休憩時間に、蒼葉がした自分の噂話から月乃の話題になった一連の流れを反芻していた。蒼葉は、夏休みに募集があった文藝コンクールの表彰式に参加した後で練習試合に合流した。その時部活に持ち込んでいたのが、式で貰っていた作品集だった。その中に入っていた桃花の詩の存在に気づかれ質問攻めされた。自分が小学生の頃、憧れだった姉の勇姿を描いたところ、最高賞に輝いたために「大会の記録」として毎年掲載されることになっていた。その詩が何度も甦った。

えいゆう　　稲切小三年　春山桃花

私のお姉ちゃん
強くてかっこいい
自まんのお姉ちゃん

真っ赤なラケットみたいな
ゆう気を心にともして
ゆっくり向かうは真っ青な台
しょうりをとらえるキバは
真っ白なピンポン球
かれいに決める一げきひっさつ
とどめの一ふり

ひとみに宿る自信
お姉ちゃんは
月にほえるおおかみのように
しょうりのおたけびをあげた

卓球に夢中だった姉が、高校から何の未練もなくその道を退いたこと、当時の言動から自分に何か隠していた可能性があること。もしも姉がずっと何かを引きずり続けているのなら、妹として痛みを共有し、少しでも力になりたいと思っていた。
ここまで空気が悪いと、また喧嘩でもしたのかと月乃に変な心配をかけさせてしまうかもしれない。そこで涼

花は、桃花と逆側の車窓を見るのではなく、フロントガラスを直視して外の景色を眺めることにした。
赤信号で停車し、月乃は手持ち無沙汰にバックミラーを覗くと、若々しさに潤んだ涼花の瞳を見つけた。
長く付き合っていれば会話が弾まない日もあるよね。月乃は事態を軽く受け流した。しかし、そのあとで、ある可能性を疑った。

涼花を自宅に送り届けると、姉妹だけの時間が訪れる。二人の好きな曲を流しながら、今日の晩御飯は何かなと語り合う。家に着けば、いつも通り二人で「ただいま」を言ってドアを開けるものだと桃花は思っていた。しかし、今日は違った。
「ごめん桃花。鍵持ってるよね。お姉ちゃんちょっと用事思い出したから先に家入ってて」
桃花はきょとんとして、バックミラーに映る姉の顔を覗き込もうとした。
「うん。いいけど、急にどうしたの？」
「ちょっと図書館行っていいかな？　課題やるために本が必要でさ」
桃花は違和感を覚えた。課題のためなら大学の図書館に行った方が都合よさそうなのに、なぜ市の図書館を選んだのか気がかりだった。
「じゃあ私も行っていい？」
胸騒ぎがしたので、さりげなく同行しようと目論んだ。
「あーもう。桃花は塾のテストが近いんだから、帰って勉強した方がいいと思うよ。むやみに出歩くとインフルもらってくるだろうし」
半分冷やかすような態度で帰らせようとした。そんなこと言ったら、なんでお姉ちゃんは出歩いてOKなの！と口答えしたかったが、課題の邪魔になってしまっては申し訳ないので潔く引いた。
「気を付けてね！」
桃花は手を振ると、エナメルから鍵を取り出した。それを見届けると月乃はすぐに去ってしまった。
「ただいま！」
勢いよくドアを開けて家に入った。しかし、彼女の朗らかな声とは裏腹に、玄関は静まり返っていた。
「あれ？」
いつもはすぐに母親か父親が出迎えてくれるのに、近くにいる気配すらなかった。明かりはついているので家にいるのは間違いないはずだ。
「お父さん、お母さん」
玄関で声をあげると、リビングにつながるドアのノブがゆっくりと音を立てた。中から出てきたのは父親だった。ゆっくりとドアを閉めると、口に人差し指を当てて、「静かに」の合図をした。

「お母さん、寝てるから」
「こんな時間にどうして？」
「まずは荷物を置いて、手洗いうがいをしてきなさい。それから話す」
「う、うん」
　訳も分からず、夢でも見ている気がした。けれど、ゆっくりと階段を上っていくと、疲労のせいか膝が軽く痛んだ。夢じゃない、本当にお母さんに何かあったんだと状況を飲み込んだ。
　洗面所でうがいをすると、並んでコップに挿してある月乃の歯ブラシが目に入った。母親に何が起こったのか怖くて、姉にも早く帰ってきてほしかった。
「お父さん……」
　ゆっくりドアを開けて、リビングに入った。本棚には分厚い図鑑やコンクールの作品集が背表紙をそろえて並べられ、カーペットは掃除機がかけられて埃一つ転がっていない。部屋が荒らされた様子はないみたいだ。母親は毛布にくるまり、ソファに寝ていた。父親は過剰におびえている桃花を見ると、大きな手で桃花の頭をなでながら、自然に笑って見せた。
「大丈夫だ。そこまで深刻なことは起こってない。それより、月乃はどうした？」
「お姉ちゃんは私を先に置いて図書館に行ったよ」
「図書館か。呑気なのか気まずくて帰ってこられないのか。女心と月乃の心は読めないからなあ」
　父親は食事用のテーブルを水拭きした。
「それ、どっちも同じじゃん」
　疲れてあきれた声で指摘した。
「桃花はバカ真面目でノリが悪いよなあ。月乃はよく分からんが、桃花が何を考えてるかは大体わかるぞ。子供心は分かりやすい」
　子供扱いされていたのを知って、ちょっと悔しかった。姉と歳が離れているせいで、いつまでも幼児のように錯覚されているのかもしれない。
「先にご飯にしちゃおう。ほら、弁当をチンするのを手伝って」
　電子レンジのボタンを操作して、「強」に設定した。一つ温めるのにも結構時間がかかる。それ以外のものを一通りテーブルに並べ終えると、父親は洗濯物をタンスにしまいながら、ことのいきさつを話し始めた。
「簡潔に言うと、お母さん、月乃とちょっと色々あったみたいでさ」
「え、お姉ちゃんが？」
「そう。普段大人しくて自分の意見を主張しない月乃が、何を土地狂ったのか、かなり粗暴な態度でお母さんに言い寄ったものだから、ショック受けちゃったみたいでな」
　学校から持ち帰ってきた桃花の給食の白衣をたたむと、袋に詰めて手渡してきた。それを両手で受け取った。

「お姉ちゃん、何て言ったの？」
「大雑把にまとめると、成人式には出たくないって言ってたな。そりゃあ手塩にかけて育てた娘が怒り狂いながらそんなこと言ったら、悲しむのも無理ないだろうな」
「理由は言ってた？」
「ああ、どうしてもバイトがって。受験シーズンだから教え子に時間割きたいのも分からなくはない。でも、何もあそこまで強く言う必要ないだろうに。バイトは嘘で、本当はやましいことでもあったのかな？」
父親は頭を掻きながら首を傾げた。ちょうど弁当が温まったのか、電子レンジが鳴った。その時、桃花はあることが脳裏によぎった。
「ねえ、お父さん。成人式で会うのって、高校の同級生？それとも小中学校？」
「本籍地が関わってくるから、小中学校の同級生に再会できるぞ」
父親は不思議そうな顔をした。
「中学校……まさか」
やっぱり部活と何か関係があるのだろうか？
「何か知ってるのか？」
「なんでもない」
そう濁すと、台所に退避して、電子レンジの弁当を入れ替えた。もし闇の一つや二つあるのなら、ブルーギルズの名に懸けて秘密は守らなければならない。部外者、ましてや家族に広まってしまったら、月乃をさらに追い詰めてしまうかもしれない。
「あ！」
その時、父親のスマホからメールの着信音が鳴った。コップにお茶を注ぐ手を止めると、内容を急いで確認し、ため息ついた。
「お姉ちゃん？」
「ああ、もうちょっと図書館にいるみたいだな。うーん、やっぱり本人も気まずくて帰ってきたくないんだろうか？」
平気そうな顔をしていて、月乃も凄く傷ついているのかもしれない。
「お姉ちゃん、このまま帰ってこないなんてことないよね？」
珠美がいじめを必死に親に隠していたのを思いだした。母親に成人式の話を持ち出されて逃げ場がないと感じたら、トカゲが尻尾を切り捨てるように最悪の手段に出てしまうのではないかと、縁起でもない妄想をしてしまった。墓場まで持っていきたい秘密があったとしたら……
「ばか、そんなわけないだろ。本気で帰ってこないのなら、親に連絡せず消息を絶つんじゃないか？」
「うん。そうだよね……変なこと考えちゃった。ごめん」
電子レンジの中でぼんやり灯る橙の明かりを見つめた。

午後七時を過ぎた図書館は、土曜日とはいえ静まり返っていた。絵本コーナーにいた親子も、ついさっき手をつないで帰っていった。残っているのは眼鏡をかけた紳士や、私服姿の高校生ばかりだった。

月乃は本を探すことなく、学習コーナーの机へと真っ直ぐ向かった。そして、途中の百均で買ったお手紙セットを開封した。

2016年。卓球部の引退から五年。そして、桃花も当時の自分と同じ中学生になっている。秘密をさらけ出すには都合がよすぎる年だった。赤本と向き合う隣の高校生に負けじと、月乃も便せんにシャーペンを走らせた。受験に臨むのと同じくらい強い覚悟を持っていた。車内で二人の様子がおかしかったこと。そして、桃花が賞を獲った大会で蒼葉も賞を獲り、作品集に載っている桃花の作品にも目を通している可能性があること。そこから自分のことが話に上がったのかもしれない。確信はできないが、その二つの偶然を結び付けて決行に及んだ。

桃花が弁当を食べ終え、風呂から上がった頃……

「月乃、もうすぐ帰ってくるらしいぞ」

父親がぽつりと言った。

「ホントに？」

桃花はバスタオルで豪快に髪の毛の水気をふき取っていた。それでも、パジャマにはまだ水滴が滴り落ちていた。

「帰ってくるのね……」

毛布の塊がもそっと動くと、母親が力なく寝返りを打った。

「お母さん、大丈夫？」

濡れた髪を放置したまま、桃花はソファの方へ駆け寄った。

「桃花、髪がびしょびしょじゃない。早く自分の部屋に行って乾かしなさい。塾のテストも近いんだから、風邪ひいちゃ困るでしょ？」

寒そうな娘を見ると、母親は寝ころんだまま目を細めた。

「弁当あるけど、食べられそうか？」

父親がビニール袋を開きながら聞いた。

「ええ、お腹もすいてきたし、ちょっと休んで元気になったから食べようかしら」

カーペットにそっと足をつけると、一気に立ち上がった。

「お母さん……」

桃花は母親を支えようとした。

「桃花、もう大丈夫だってば」

湿った彼女の頭を二回軽くたたいた。

「謝らなきゃいけないのは私の方だわ」
そう独り言を残すと、食事用のテーブルの方に向かった。
「どうして？」
桃花は思わず聞いてしまった。
「なんでもないのよ。ほら、あなたは早く自分の部屋に行ってなさい。桃花は桃花のやるべきことをやってていいわ」
母親の体調は安定していることが分かったので、リビングを後にした。塾から支給された去年の過去問を進めておくことにした。

「ただいま……」
俯きながら月乃がドアを開けた。マフラーが口元まで上げられ、まるで泥棒の様な風貌である。
「月乃、おかえりなさい。待ってたわよ」
出迎えたのは母親だった。突き上げるように脈が速くなった。どうしていいのか分からず、玄関先で立ち尽くしてしまった。
「怒ってなんかいないわよ。さあ、あったかいお弁当用意してあるから、手洗って食べよ」
彼女の腕を引いて中に入れさせた。月乃は目を合わせなかったが、あからさまに不機嫌な表情を浮かべていた。しかし、相手は母親ゆえに、抵抗することができなかった。散歩に連れ出される犬のように、そのままリビングへ連行された。そこまで行くと観念したのか、彼女は手洗いうがいをして席に着いた。
用意されていたのは生姜焼き弁当だった。温まりすぎて、まだ湯気をあげていた。
「お父さんがあなたのために選んできたのよ。月乃は本当に肉が好きだもんね」
ソファの上で飲むコーヒーを入れていた父親も、台所で頷いた。母親も席に着くと、自分のシャケ弁の蓋を開けた。
「さあ、食べなさい」
食欲がないと思われたくなかったので、割りばしを切り離してご飯を一口頬張った。彼女が食事を飲み込んだのを見届けると、頬杖をついてニコッと笑った。
「おいしい？　まあ、出来合いの弁当なんだけどね」
月乃は肉を頬張りながら頷いた。
「……ごめんね月乃。あなたはもう大人なんだもの。行動一つ一つ親に詮索されたくないわよね」
月乃は租借を止めた。そして、麦茶で一気に飲み込んだ。
「あなたが小さかった頃、桃花ばっかり見ててあなたのことをおろそかにしておいて、今更手のひら返して月乃に……なんて、遅かったみたいね。あなたは私の手の届

かないところまで行ってしまった」
　もっと月乃の心配もしてあげればよかったと気づいた時には思春期で、逆に親を必要としていなかった。
「あなたにはたくさん寂しい思いさせたわね。かけっこで一位を獲ったこと、俳句で賞を獲ったこと、中学のテストで学年一位を獲ったこと、もっと褒めてあげればよかったなって後悔してるの」
　母親は箸を置くと、ため息をついた。
「お母さん、もういいよ、そんな過去の栄光のことなんて。ちーっとも気にしてないから。私こそあんなに強く言ってごめんなさい。もうこの話はおしまいにして、おいしくご飯食べようよ」
　月乃は吹っ切ったような笑顔を見せた。しかし、内心彼女に対して強い恨みと、申し訳なさがぶつかりあって火花を散らしていた。成人式に出られなくなる根本的な原因をつくったのはお母さんなんじゃないか……お母さんは私が頑張って事には興味示さなかったくせに、汚点ばかり見つけて難癖付けたがった。無関心だったなんて嘘に逃げないでよ！　月乃は貪るように肉を食べ、麦茶を飲み干してごちそうさまをした。そして、自分の部屋に向かうべく階段を上がった。床は氷のように冷たいが、お気に入りのフェイクファーのスリッパが足裏を守ってくれた。

　翌日は日曜日、桃花と月乃は部活にバイトにそれぞれの生活を送った。母親も何事もなかったかのようにためていた録画番組を観て、父親も寒空の下で愛車を念入りに磨いた。
　その夜、
「桃花、土日両方練習あったし、明日って朝練休みだよね？」
　夕食を終え自室へ行こうとする桃花を、歯ブラシをくわえたまま追いかけて聞いた。
「うん。ないからゆっくり寝てよう思う。でも、いつもそうなのに何でわざわざ聞いたの？」
　この法則は崩れたことがなかったので不思議に思った。
「いや、別に深い意味なんてないよ。私明日は早く出てくから、桃花が寝てるのに朝ドタバタしたら迷惑だろうし」
　事実明日は一限があるので、決して適当な嘘などではない。
「どーせぐっすり寝てるから気にしなくて大丈夫だって！　授業頑張ってね」
　桃花は純粋に自分を応援した。今となっては愛おしい妹に、明日残酷な事実を伝えなくてはならないなんて。決めたことなのに苦しかった。
　課題を早めに済ませ、もう寝ることにした。朝練がな

ければ桃花は七時ごろ起きてくる。スマホのアラームを六時にセットし、封をした手紙を机の上に置いた。明日家を出る前に、寝ている桃花の部屋に忍び込み、手紙を目の付くところに置こうと計画を立てていた。宛名は本人だけでなく涼花たちブルーギルズのメンバーも入れておいた。先の計画のためにもチーム全体に共有してもらった方が都合がいい。

翌朝、計画通り手紙を桃花の部屋の勉強机に置いた。そして、静かに寝息を立てる妹に、心の中で「行ってくるからね」と一声かけた。

昼過ぎ、鈴蔵中では給食の時間が終わった。桃花は封筒をクリアファイルに忍ばせると、先生の目を盗んで廊下を小走りした。向かったのは涼花のいる教室だった。

「すみません、佐原さんはいますか？」

教室に入ろうとしていた眼鏡の女子を捕まえて、涼花を呼び出してもらった。勉強熱心な涼花は、自席でワークを進めていたようだ。

「はーい、どうした桃花？　もしかしてクリスマスプレゼントでも持ってきてくれた？」

テンション高めで飛び出してきた。

「ないないない。それより、もっとすごいものがあってね……」

廊下に連れ出した。

「えー、桃花と、私たち宛に手紙？」

やはり怪訝そうにしていた。

「私もまだ見てないんだ。朝起きたら机の上にお姉ちゃんが置いて行ってたみたいなの。見るなら涼花がいた方がいいかなって思って」

直接渡していないところに、なんとなく闇深さを感じていた。

「じゃあ、開こうか」

若い男が扉を開けて鶴を見た時のように、二人はドキドキしながら封を開けた。すると、数枚ほど紙が出てきた。

〜ブルーギルズのみんなへ〜

ブルーギルズのみんな、学校生活は楽しんでいますか？　私からみんなへ、どうしても伝えたいことがあって手紙を書かせてもらいました。本当は全部自分の力で解決しなくてはいけないことなのですが、私は思ってる以上に弱い人間で、どうしたらいいのか分からないのです。だから、ブルーギルズのみんなの力を貸してほしいのです。これから今に至ったいきさつを長々書いていきますが、最後まで読んでくれたらうれしいです。

二人は深呼吸をして、手紙に神経を集中させた。

長くなるので先にネタばらしから入ろうと思います。私が現役の卓球部員だったころ、己の身勝手さからある過ちを犯してしまいました。そして、信頼関係が破綻してしまったがゆえに、えん罪まで押し付けられ学年中から避けられるようになりました。いじめられたとは思っていません。むしろ彼らが被害者なので当然の報いだと思っています。時間が経つにつれ過ちの重さに気づき、一言で表すことのできない罪悪感にさいなまれているのです。前置きはこの辺にして、詳しく書いていこうと思います。

桃花は心配そうに涼花を見つめた。涼花は「私がいるから大丈夫！」という力強いまなざしで相棒を見つめ返した。

中学の部活で犯した過ちの根っこには、もっと小さい頃に抱いた価値観がありました。「愛されるために必要なのは結局実績」というものです。桃花は幼くて知らなかったと思いますが、私は幼稚園や小学生の頃いろいろな習い事をしていました。ピアノに陸上、バレエ、本当にたくさんのことをしていました。ただ、残念なことにどれも上手くいきませんでした。上手くいくというのは他の仲間のように、大会でいい結果を残したり、メディアに出ることです。私はそれなりに頑張っていましたが、なぜかどれでも成功を収めることができませんでした。母親は自分の娘だけが落ちこぼれで気に入らないのも無理がありません。できることを見つけて褒めるのではなく、ただひたすらに難癖をつけて悲観していました。先生も先生で、実績のある人ばかりえこひいきしていました。子供の安全基地であるはずの家でも、親は赤ちゃんの桃花ばかりかわいがって、私に愛はくれませんでした。だから、私はいつも寂しい思いをしていました。その頃、動物ドキュメンタリー番組で、体の大きなきょうだいに勝てず、餌を食べられずに死んでいく赤ちゃんを見て、自分も桃花に「愛（えさ）」をとられてしまうと思ったのです。歳十にもならないうちから、この世は弱肉強食の世界だと、獣の子のように信じ込んできました。けれど、幸い人間である私はたとえ子供であろうと、自分の脚と頭でどこへだって行くことができ、自分で「愛（えさ）」を探すこともできます。だから、習い事でちやほやされる仲間を見

て、同じように愛情を外部に求めていくようになりました。何か輝かしい結果でも出せれば、極上の愛や注目を得ることができるんだ！　そんな私は中学の時、生き残っていくために進化を遂げました。人気がなく経験者（てんてき）が少ない卓球部という草原へと生息地を変えたのです。ゴミみたいに扱われるモブではなく、卓球部という物語の主人公になりたかったのです。神はこんな私を哀れに思って情けをくれたのか、賭けには成功しました。素振りの段階から顧問らに素質を認められていました。そんな中、私たち新入生は三年生の最後の夏体の応援に駆り出されました。そこで見た光景に大いに落胆しました。団体戦も個人戦もあっという間に負けて全滅。誰一人として表彰を受けることはありませんでした。天敵がいないということは、その生息域の中に強い種がいないということに等しい。これまでの習い事なら先輩方の入賞ラッシュはつきものだったのに……なんてしょぼい世界に足を踏み入れてしまったのだと落ち込むと同時に、ある野望を抱きました。私が数年越しのの救世主となってこのチームを県大会に導きたい。弱小校なんて言わせない！というものです。一年生のうちからとにかくプレーの研究をして実力をつけ、一番であり続ける努力をしました。クラスメートから「女卓で一番強いの誰なん？」と聞かれたら、「えへへ、実は自分なんだ」というのがたまらなく快感でした。そして、二年生になった時に部長に推薦されました。私は「みんなで県大会に行こう」という目標を立てました。先輩たちが叶えられなかった夢を自分たちの代で達成できたらどんなにすばらしいことか。だから、みんな私についてきました。それに応えるべく「みんなで」強くなるために、懸命にアドバイスをして仲間を伸ばそうとしました。部活はとても充実していて、一年生の時に買った、白狼の勝守を揺らして練習に向かうのが大好きでした。そう、私は仲間を導いていくリーダー、桃花が詩で書いた通り、まさに白き英雄狼でした。

しかし、それは甘いことではありませんでした。新人戦を過ぎても、仲間の勝率は上がっていきませんでした。それどころか、部活がだるいとか、練習日が減ればいいのにと不満をこぼす部員が増えていきました。みんな私が立てた目標を本気で目指しているわけではなかったことに気づけませんでした。依頼を通して、部活に様々な思いを抱いている選手に出会ってきたみんなら分かるでしょう。彼女たちにも大切な家族がいたり、将来の夢を叶えるための努力に時間を割きたい人もいたはずです。全員が主人公で、自分の望むように部活をする権利があったはずです。なのに、主人公気取りの私は、上を目指そうとしない彼女たちに不満を覚えていきました。こんなやつらに付き合っていたら、自分はモブの道連れにされてしまうに違いない。だから、もういっそのこと自分

だけで強くなって一人で県大会に行ってしまおう。チームを勝利へ導いてともに夢をかなえるよりも、選ばれし一人として勝ち進む方が英雄じゃないか。独り占めの価値観を暴走させてしまいました。それからもう私は仲間を心ある人間として見ていませんでした。生きてる世界が違うと思ったから。新しく習得した技をぶつけ、試合に使う価値があるか試すための存在、すなわち実験用のマウスやラットになっていました。しかも、自分の練習になるよう、相手に強く頼み込んで特定のサーブを出すように命令しました。か弱い実験動物は貪欲な狼に歯向かうことなどできずに、自由を捧げていました。その結果、精神に異常をきたして不登校になってしまった仲間もいました。私は彼女たちから部活だけでなく修学旅行も青春もごく普通の未来も奪ってしまいました。口の中に光る無数の凶器で獲物を殺す、冷酷な狼のように。冷静に考えれば大問題ですが、私は自分が悪いとは思っていませんでした。卓球が弱いやつだから心も弱いんだ！脱落していった仲間たちに心で難癖をつけていました。いつか自分がそうされたように。どんな時でも頂点に立っている主人公の自分がチームで一番愛されて支持されて当然と思っていた。仲間は小学生の間、生ぬるい経験しかせず苦労してこなかった人ばかり。いわば安全な研究室で生まれて、決まった時間に餌をもらっていたマウスたち。厳しい環境を生き延びてきた狼には、幼い頃に刷り込まれた真理の正誤など疑うすべもなかったのです。

そんな中、三年生の最後の大会で事件が起こりました。私は着実に強くなっていて、県大会出場を決める試合で強豪校の選手に当たりました。フルセットに突入する死闘の末、私が勝ちました。夢の切符を手にしたのです。そのあと、会場の廊下で顧問から叱責を受ける試合相手を見た時、大きな獲物をしとめた心地がして幸福のバロメーターが急上昇していきました。

ところが、数日後の新聞にとんでもないことが書かれていました。「卓球部不適切指導、中三女子生徒自殺か」という見出しが一面を飾っていました。こんなの偶然だ、別の地方のものだろうと思っていましたが、文面から私があの日倒した選手だと分かり凍り付きました。弱小校に負けたことを執拗に責めたんだとか。彼女はそれを苦に自ら命を絶ったようです。地元で起こった大事件は、どのクラスでも話題になりました。どんな世界にも知りたがりはいて、彼女の試合相手が私であることを突き止められてしまいました。女卓から次々に不登校が出る理由も知れわたっていました。だから、井の中の蛙で威張り腐っている春山さえいなければ、彼女だって死ななかったのに、と誰もが私を責めました。一番悪いのは向こうの顧問なのに殺人鬼扱いです。思えば私は卓球部で部長をやっていい人間ではなかったのです。幼い頃やっていた「習い事」は、各自が極めたいという意思を持って

入るものだから、そろって上を目指すのは当たり前。けれど、公立中の部活は半強制的に入らされるもの。まして初心者だらけの緩い運動部なんて何人が本気で取り組んでるだろうか。私が大切に握ってきた価値観のまかり通る場所ではなかったのです。勝敗よりも仲間との絆を深め社会性を育むことが目的の部活では、進化を遂げたところで私は組織を崩壊させる特定外来生物だったのです。大人になれない、愛に飢えた生き物のわがままでたくさんのものを奪ってしまいました。自分には卓球を続ける資格がないと気づいた時には手遅れでした。もう戦いたくない。もう誰も傷つけたくない。大切なものを奪いたくないし、何も失いたくもない。だから、念願の県大会一回戦でわざと負けました。こんなくらいでは償いにならないと分かっていましたが、自分にできる精いっぱいの切腹行為に及んだつもりでした。人々を導く英雄だった主人公は悪の独裁者となり、モブたちに追放されてしまいました。そして、皮肉にも夢の舞台で選手生命を自ら断つことになってしまったのです。どうでしたか？　これが私の犯した罪というものです。

　それから高校、大学と同級生から離れたところで人生経験を重ねていきました。生き方を改めていたせいか、仲間からピュアだとか謙虚だとか言われてきたけど、自分の犯した罪を想うと、彼らを騙しているようで苦しかった。そのたびに卓球部のことを思い出して、本当に切腹したくなるほど心の傷が叫ぶのです。引退から早五年、いいかげん引きずるのはよくないと思い、成人式をきっかけに関係者に謝罪したいのですが、ことが大きかったが故にとても勇気が出ません。こんな私に、ぜひブルーギルズのみんなの力を貸してほしいのです。今まで隠し事をしていてごめんなさい。

春山月乃

「これが、お姉ちゃんの本性だったの？」

　信じられないという風に、手紙を持った手を震わせていた。あんなに尽くしてくれていた月乃が、かつて自分を忌々しい天敵だと信じてやまなかったこと、そして一つの部活を乗っ取って崩壊させたことを知って、生きた心地がしなかった。自分が生まれてきたことにさえ罪悪感を覚えた。

「私、生きてちゃいけなかったのかな……私がいなかったらお姉ちゃんは幸せだったはず」

　桃花がぼそっとつぶやくと、涼花は焦ってを見開いた。

「きゅ、急に変なこと言わないでよ。今も桃花のことを憎んでいるわけじゃないだろうし、過去は過去。そこはしょうがないよ」

　桃花は窓から中庭を眺めた。イロハモミジの木はほとんど葉を落としていた。紅葉がきれいなうちにもっと眺

めておけばよかったと思っていても、秋にさかのぼることはできない。次の秋を目指して日々過ごしていかなければならない。
　いままでお姉ちゃんがいてくれたからブルーギルズの活動ができた。だから今度は自分の番だ。学校からもよく見える名山から吹き下ろす風がモミジの木を揺らすのを見届けると、覚悟を決めた。
「涼花、お姉ちゃん、いや、大切な仲間のためにも一緒に頑張ろう！」
「うん。ベストを尽くそう！」
　二人はしっかりと握手をした。涼花の手は温かく、冷えて震える桃花の手を慰めていた。

続く